

# あなたのスキルは社会に役立つ

## エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第143回

### 済州島に東アジアのシビックハッカー大集合！

●武貞 真未(たけさだまみ) [@mamisada](#)

#### Facing the Ocean Meet&Hack を3年半ぶりに開催

シビックテックコミュニティを運営するCode for Japanでは、自治体やNHKとのコラボレーションでアイデアソンやハッカソン、プロトタイプ開発コンテストなどを実施しています。そのうち、定期開催の主催イベントとして、毎月だいたい第四土曜日に開催しているソーシャルハックデー(プロジェクト持ち込み型ハッカソン)があります(写真1)。ソーシャルハックデーは、台湾のシビックテックコミュニティ「g0v(ガブゼロ)」が台北で開催していたg0v jothon(零時政府揪松團)からインスパイアされて始まった開発イベントです。Code for JapanファウンダーのHal(関 治之)さんがg0vチームに日本版の開催を打診した際、「Why not?(ぜひ、もち

ろん)」と二つ返事をもって、2018年から開催しています。台湾は10月14日の開催で58回目、日本は10月29日で55回目を迎えます。

ハッカソンを同日開催にしてプロジェクトを共有し合う時間を設けたり、コミュニティが年次開催しているサミット(カンファレンス)をお互いに訪問したりして親交が深まり、「各国のハッカソンの拡張版として、同じ海に面している台湾・香港・韓国・日本などでシビックテックに取り組んでいる人たちが一堂に介して交流できる場を設けたら情報交換やコラボレーションの機会になるのではないか」と構想が膨らみました。そこでg0v-intl(零時政府国際交流小組)のメンバーとCode for JapanのHalさんと筆者、Code for KoreaのOhyeonさんにより、東アジアの合同ハッカソン「Facing the Ocean Meet&Hack」の開催を進めていきました。

初回は2019年6月に沖縄で、第2回目は同12月に台南(台湾)で開催しました。第3回目として済州島(韓国)での開催の企画を始めたところでCOVID-19の影響を受け、しばらくの間オンラインミーティングのみで交流を続けていました。そして東アジアのシビックテックコミュニティで活動している仲間が3年半ぶりに集合したのが、今回のFacing the Ocean Meet&Hack 2023 in Jejuです(表1、写真2)。

Facing the Ocean Meet&Hackでは、プロジェクトオーナーが企画を持ち込み、それに賛同し

◆写真1 アメリカ・アフリカ・アジアで24時間ハッカソンリレーをしたソーシャルハックデー



## 済州島に東アジアのシビックハッカー大集合!

た参加者がプロジェクトごとのテーブルに集まり、開発を進めていきました。一般的なハッカソンと異なり、期間中にも興味があるプロジェクトを1つに絞れなければ複数プロジェクトを掛け持ちしてもいいのが本ハッカソンの特徴です。今回、Code for Japanからは2つのプロジェクトを持ち込みました。

## ディスインフォメーション

ディスインフォメーションは、海外のシビックテックコミュニティでも頻繁に取り上げられているテーマです。日本では「フェイクニュース(偽のニュース)」と呼ばれることが多いですが、本来の意味は偽のニュースだけでなく、偽と言い切れない情報、操作された情報、ニュース以外の情報も含みます。g0vやCode for Koreaでは5年ほど前からプロジェクトが進められており、世界各国のシビックテックコミュニティをつなげるCode for AllでもSlackチャンネルで各国の情報交換・意見交換が行われています。日本では言語の壁もあり、これまで大きく取り上げられることが少なかったのですが、ウクライナ情勢をきっかけに日本でも取り組むべきではないかと声が上がるとなりました。

そこで今回、台湾・韓国の事例から学びながら進められるのではないかと持ち込みました。2日間のハッカソンで完結する規模のプロジェクトではないため、今後も台湾・韓国のコミュニティとSlackで連携しながら進めていく予定です。

## 不眠症向け支援ツール

不眠症支援プロジェクトは、シチズンサイエンスのアプローチに関心がある有志が企画運営しているポッドキャスト「バク睡らちお」<sup>※1</sup>から派生した取り組みです。ポッドキャストでは、心理士や研究者、不眠症当事者が集まり、眠りやメンタルヘルスにまつわるトークをしています。本プロジェクトでは、「そもそも、睡眠に課

注1) <https://podcasters.spotify.com/pod/show/ncnp-cbt-sleep/>

◆表1 開催概要

開催期間	2023年6月9日～11日
参加者数	79名(韓国:44名、台湾:20名、日本:19名、インド:1名、香港:1名)
参加団体	Code for Korea(韓国)、g0v(台湾)、Code for Japan(日本)、Brian Impact Foundation(韓国)、Parti(韓国)、NHK(日本)

◆写真2 初日の集合写真



題があるかを調べるための睡眠記録シートがアナログで使いにくい」「データで入力してデータで共有できたらいいの」という不眠症当事者の意見から生まれた睡眠記録シートのデジタル版「gussuri」を開発しています。

台湾・韓国も日本に負けず劣らずの睡眠不足大国であることを紹介すると、身近な人や自身に関わるテーマだと感じた技術者たちがテーブルに集まり、言語切り替えなどの機能追加や多言語対応に協力してくれました。「Nuxt.jsを触ったことがあるから大丈夫」とすぐ開発に着手してくれた参加者や、「このプロジェクトへの参加が人生初のOSS参加、Pull Requestになった!」と喜んでくれた参加者もいて、他国の仲間と連帯して同じ課題に取り組んでいると実感することができました。

## 英語がしゃべれなくても、コードで話せる

過去開催した2回は、運営側として参加しているHalさんと筆者以外の日本からの参加者比率が低い状況にありました。周りのシビックハッカーを誘っても「英語は苦手」「聞き取れないから」とためらう人が多く、台湾や韓国のシビックテックコミュニティを実感してほしい!という運営の気持ちとは裏腹に、なかなか参加者を集めることが難しい状況が続きました。



しかし、新型コロナウイルス感染症対策サイトをきっかけに海外からの参加者も増えました。Code for All Summitでの日本国内事例の紹介<sup>2)</sup>、第二言語である英語で意見交換しながら台湾・韓国の仲間と進めたジェンダーイシューのプロジェクト<sup>3)</sup>など、日本国内コミュニティでも英語を使ったり海外の仲間と交流したりする機会が増え、環境が整ってきたこともあり、今回は過去最大の19名が参加してくれました。

Facing the Oceanに参加している技術者は東アジアの各地ですでにシビックテックの活動に参加しているので、「地域や社会に貢献したい」「オープンデータやOSSを活用したい」「市民参加型のプロジェクトをしたい」といった共通認識(Common Sense)を持っています。そのため、多少語彙や文法に支障があっても、相手の意図していることがわかったり、自分の話していることを理解してもらえたりすることが多々あります。また、技術者同士の場合、GitHubのプロジェクトページを見せながら話していれば、うんうんとうなずいてそのまま役割分担をして開発に入ってくれるということも少なくありません。多くを語らずともシビックテック(共通認識)とコード(共通言語)を協働できる基盤がすでにあるので、安心して外の世界にチャレンジできるでしょう。

## 近接する東アジア圏の技術者同士の関わりから

シビックテックを行ううえで、多様性と包括(Diversity & Inclusion, D&I)<sup>4)</sup>は欠かせません。日本で活動をしていると、どうしても「日本列島人(人種)」「日本語をしゃべる(言語)」が前提になってしまっていたり、技術者を集めようとすると20~50代の男性ばかりになってしまったりします。そのため日本で働く技術者は

注2) [https://www.youtube.com/watch?v=DYs0oFDwR\\_8](https://www.youtube.com/watch?v=DYs0oFDwR_8)

注3) <https://hackmd.io/@codeforjapan/owarana1>

注4) 多様性を認識するだけではなく一人一人が受け入れ、尊重することによって個人の力が発揮できる環境を整備したり、働きかけたりしていくという考え方。

年代も性別も国籍も言語も同じ人同士でプロジェクトを進めることに慣れすぎているように感じます。

日本で企業に所属する女性技術者はこの10年で7ポイント増加し23%になったものの、管理職の登用は7%にとどまっております<sup>5)</sup>、進学・就職・育成・仕事と子育ての両立というフェーズごとにも課題を抱えています。そのため、日本に暮らす技術者が海外の技術者と交流の機会を増やすことと次世代女性技術者をサポートすることはシビックテックコミュニティとしても重要なことだと筆者は考えています。

普段の業務が日本語で国内の関係者とのみで完結している技術者にとって、いきなり英語で話して海外の技術者とプロジェクトで協働するのはハードルが高いことかもしれません。そのため、「ゆくゆくは英語を使ってみたい」「いずれは海外の人とも一緒に働いてみたい」と思い描いている方がいれば、本業の仕事で挑む前のステップとして、東アジアのシビックテックコミュニティが開催しているこのハッカソンへチャレンジすることをお勧めします(写真3)。

## 対話の習慣は自陣にも持ち帰れる

Facing the Oceanには台湾、韓国、日本からハッカソンに参加するエンジニアやデザイナー

注5) 情報サービス産業 基本統計調査(2022年版)  
<https://www.jisa.or.jp/Portals/0/report/basic2022.pdf>

◆写真3 ハッカソン会場での議論・開発の様子



だけでなく、これらの取り組みを研究対象としてリサーチしに来るアジア圏外（欧州など）の研究者、開催地域の自治体職員や関連組織のメンバーなど、さまざまな人たちが集まります。お互いに異なる背景を持つ前提でコミュニケーションを取るため、普段のハッカソンのような技術的な情報交換（WhatやHow）だけでなく、プロジェクトの背景、彼らの働き方や暮らし方、地域や国の歴史、自分たちがなぜシビックテックに関わるようになったかなど、背景や文脈（WhyやWho）に立ち戻って丁寧に対話をする機会が自然と増えます。そしてこれは、同じ文化・価値観を持っていると勝手に思い込んでしまいがちな日本国内での人や組織との対話にも非常に参考になるものです。

開発プロジェクトをチームで進めていると、全体のプロジェクトマネジメントに関して、見積もりどおりにスケジュールが進行しない状況に陥ったり、トラブルやエラーで追加の工数が発生したりします。さらに、技術者同士の連携において、コードの書き方やGitHubなどツールの使い方<sup>6</sup>で齟齬<sup>7</sup>が生まれたり、意図せず不具合を発生させてしまったりすることもあります。

こまめな対話を積み重ねていくと、これらを未然に防いだり、起きたとしても最小限に抑えたりできます。ですが、なんとなくの暗黙知をそのままにしていたり、理解してるだろうと確認を省略したりしていると、意図せずチームに不和を生んだりプロジェクトを炎上させてしまったりすることも少なくありません。PMやPOの責任と一蹴することもできるでしょう。ですが、技術者の一人一人が対話の機会を増やし、多様性や包括を意識することで、チーム全体の心理的安全性を高め、建設的な意見の対立がしっかりと起こる環境を作れます。そしてそれがプロジェクトを円滑に進めることになるのではないのでしょうか。

このように、外での経験を国内に持ち帰ることが身近な人に対するD&Iになり、結果として自分を含めてチームが働きやすい環境を作った

り、プロジェクトを推進したりといった好循環を生み出せると感じています。

## 海外に行くより身近な参加方法「サミット」

「気軽とはいえ、海外ハッカソンはハードルが高い」という方にはもう1つ方法があります。日本で毎年開催しているシビックテックのカンファレンス「Code for Japan Summit」<sup>注6</sup>への参加です。g0vやCode for Koreaなどからの参加者もいるので、日本にいながら、海外コミュニティの仲間たちと交流できます。また、国内の各地域でシビックテック活動をしているブリゲード<sup>注7</sup>のみなさんも集まるので、グローバルにもローカルにも目を向けて、さまざまなシビックテックに触れることができるイベントです。

2023年は11月25日に日比谷（東京）に会場を設けて開催する予定です（図1）。対面会場もオンラインも参加費無料で、終日参加ではなくても出入り自由です。シビックテック・国際交流・地域貢献・まちづくりなどに少しでもアンテナが反応する人は立ち寄ってみてください。シビックテックに足を踏み入れ、day1を迎える人が1人でもいることを楽しみにしています（そのときはコミュニティのSlackワークプレイス<sup>注8</sup>で、こっそりでもいいのでお声掛けください）。SD

注6) 今年で10回目を迎える国内最大級のシビックテックカンファレンス。<https://summit2023.code4japan.org/>

注7) ITで地域課題の解決に挑戦する地域団体。北海道から沖縄まで全国各地に拠点を持って活動しており、数は80を超えます。<https://www.code4japan.org/brigade>

注8) <https://www.code4japan.org/activity/community>

◆ 図1 サミットサイトのトップページ

